

全国消防救助技術大会

仙台・宮城が開催

8月23日、全国各地の消防隊員が救助技術を競う「全国消防救助技術大会 仙台・宮城」が利府町のグランディ・21宮城県総合運動公園で開催されました。

この大会は、さまざまな訓練種目を通じて、隊員の救助技術の向上を図るとともに、他の模範となるような隊員を育成することを目的としています。46回目を数える今回は、東日本大震災後初めて東北地方で開催。大会スローガンの



「結—感謝そして未来へ—」には、震災時、人命救助の最前線に駆け付けた全国各地の消防隊員をはじめとする、全国からの温かい支援に対する感謝と、未来を切り開く仙台・宮城の姿を発信するという思いが込められています。

訓練は「陸上の部」と「水上の部」に分かれ、各8種目を実施。ロープを渡り隣の建物へ救出に向かう訓練や、数人で連携し溺れている人を救助する訓練など、的確で迅速な技術を競いました。全国各地の予選を勝ち抜いた約1000人の隊員が、日頃から鍛えた救助技術を披露。仙台市消防局からは49人が参加し、スピード感あふれる動きで観客を沸かせました。隣接する会場では、レスキュー活動等の体験や震災時の状況を学ぶブースなどもあり、約2万1千人の来場者でにぎわいました。

市営バス75周年・地下鉄30周年記念バス・ちか祭り

市営バス開業75周年と地下鉄開業30周年を記念し、9月3日に荒



お絵かきバスには、たくさんの個性豊かなイラストや文字が描かれました

井車両基地で「バス・ちか祭り」を開催しました。

この日は荒井駅周辺で、フードコートや、手作り品を販売する「荒井なないろマルシェ」など、7カ所のスポットをまち巡りする「あらフェス2017」があり、バス・ちか祭りもそのスポットの一つとして行われました。普段は入ることのできない荒井車両基地内の施設の見学をはじめ、東西線車両の運転席への試乗体験、本物同様に石炭で走るミニSLの運行などのイベントに、多くの親子連れなどが訪れ、行列を作っていました。

また、バスの側面を白く塗装し、キャンバスに見立てるお絵かきバスも開催。子どもたちは熱心に、思い思いの絵を描いていました。完成したお絵かきバスは、本年度末まで市内を運行する予定です。

迫力満点の恐竜わらアートを展示しています

恐竜わらアートの展示が、今年も農業園芸センターみどりの杜で始まりました。12月3日まで、全5体を展示しています。

わらアートは、東日本大震災で被災した若林区内の農地で栽培された稲わらを使用し、震災復興の象徴として、一昨年から実施しているものです。制作にあたっては実行委員会やボランティア団体の学生が中心となったほか、わら付け作業の体験イベントなどで、多くの市民の皆さんにご協力いただきました。会場では、全長4メートルのブロントサウルスが初登場。毎年人気のティラノサウルスやトリケラトプスなども展示されています。



ブロントサウルスの特徴である、巨大な体と長い首が見事に再現されています

和牛の祭典が開催されました

9月7日から11日までの5日間、和牛の日本一を決定する「全国和牛能力共進会宮城大会」が開催され、会場の夢メッセみやぎ（種牛の部）と中央卸売市場食肉市場（肉牛の部）では、約41万7千人が和牛の魅力を楽しみました。

全国和牛能力共進会は、5年に1度、全国の優秀な和牛を集めて、その優秀性を競い合う品評会です。体型の良さなど、改良成果を審査する種牛の部と、枝肉の状態や肉質を審査する肉牛の部に、合わせて約500頭の和牛が出品されました。宮城県勢は、県勢初の首席を獲得するなど、9つの出品区のうち、8つで入賞。道府県別の団体表彰でも過去最高の4位に輝きました。



▲審査会場には日本一の牛を見に、多くの観客が詰め掛けました

行財政改革を進めています

市では、平成28年3月に策定した「行財政改革推進プラン2016」（計画期間＝平成28年度～33年度当初）に基づき行財政改革を推進しており、平成29年度当初までの実績を取りまとめました。計画に掲げる49の項目による効果額は、平成29年度当初時点で約62億円となっています。

今後、行財政運営の一層の効率化と適正化を進めていきます。（主な取り組み）

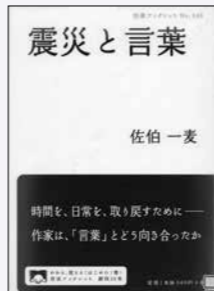
- 将来を見据えた攻めの行財政運営
 - 有建築物等の長寿命化等の取り組みの推進
 - 市民とともに行うまちづくり「協働まちづくり推進プラン2016」の策定
 - 職員力を最大限生かした市政運営
- 将来のまちづくりに貢献できる人材の育成

◎「行財政改革推進プラン2016」の平成29年度当初までの実績は、市役所本庁舎1階市政情報センター、宮城野区・若林区・太白区情報センターで閲覧できるほか、市ホームページでもご覧いただけます

3.11 震災文庫を

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりの本を2冊紹介します。

「震災と言葉」



佐伯一麦 / 著 岩波書店 刊

仙台在住の作家・佐伯一麦さんが、あの地震と津波から約1年後、大学の公開講義でお話された内容を再録した本です。繰り返す語られるのは、言葉

の役割。震災直後の「言葉の真空状態」の後、言葉は、ある人には日常を取り戻す手掛かりとなり、またある人には遺言になった。震災は、そんな言葉の姿を捉え直す契機になったと佐伯さんは言います。そして、悲劇に直面し、復興とともに成長していく子どもたちが言葉を持つとき、そこに文学が生まれると期待します。

薄くて小さな本ですが、言葉を通して震災を思い出し、見つめ直す、その手助けをしてくれるような一冊です。

「つなみ」



森健 / 企画・取材・構成 文藝春秋 刊

あの年の夏に刊行された「つなみ」被災地の子どもの作文集（文藝春秋）で作文を書いた子どもたちが、5年後に再び書いた作文集です。

5年前の作文には書けなかったこと、5年後の作文だから書けること。行き先のなかった多くの言葉が、つらく切なく、また力強く頼もしく書かれています。ここにあるのは、彼ら、彼女らにしか語れない言葉です。だからこそ切なく、頼もしく、読む側に伝わってきます。

「あたりまえの日々に、『ありがとう』。復興とともに成長していく（かつての）子どもたちの作文は、この地で長く読み継がれるべき力を持つ、たくさんの言葉であふれています。

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます。問市民図書館 ☎261・15805